

第 89 回 防災カフェを開催しました。



全国初、外国人機能別消防団員の可能性

～支えられる側から支える側へ～

日時：2024年7月26日（金）18時30分～20時

ゲスト：草津市国際交流協会副会長・全国多文化共生マネージャー

中西 まり子 さん

ファシリテーター：草津市国際交流協会 多文化共生部会部会長

鶴田 真理子 さん

災害時要援護者である外国人の急増と消防団員確保という課題に対し、草津市は災害弱者になりがちな外国人を機能別消防団員に任命してきました。彼らは語学能力を生かして「助けを求める側」から「助ける側」として防災減災対策と多文化共生の側面で活躍されています。

草津市の現状

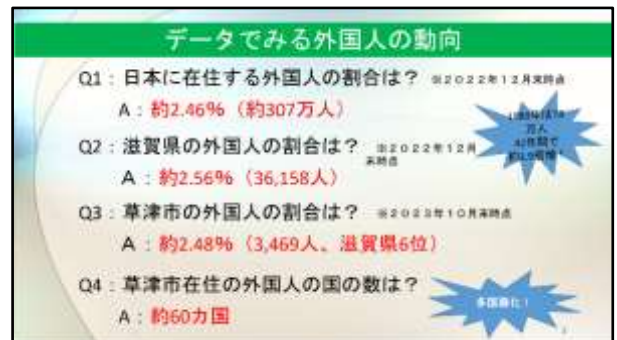
鶴田さん：全国初めての取り組みだったわけですが、なぜ草津市に外国人機能別消防団が生まれたのでしょうか。



中西さん：日本の人口は減っていて1億2000万人ぐらいですが、**ゲスト：中西 まり子 さん** 現在日本に在住する外国人の数は、約332万人と増加しています。滋賀県は外国人の方が約100カ国から約36,000人と全国平均よりも少し高い割合で、草津市は3,469人、割合は2.48%で、滋賀県の市町の中で6位、日本の割合とほぼ同じになっています。

鶴田さん：草津市に住んでいらっしゃる外国人の国の数はいくらくらいでしょうか？

中西さん：約60カ国で、多様化しています。中国、韓国、そしてこの7年間でベトナムが急増して、中国とベトナムが拮抗している感じです。日本の平均年齢は40代後半ぐらいで、働き盛りがだんだん少なくなってきました。それに比べて外国人は働き盛りの20代から30代までが67%を占めていて、若い層が多いことがわかります。在留資格別に見ると草津市は留学生の比率が高いです。滋賀県、関西でもトップクラスです。草津市周辺には立命館大学のびわこくさつキャンパスや滋賀医科大学があるので、留学生が多くなっています。



中西さん：留学生というと日本人の感覚では19～22歳ぐらいのイメージですが、1度社会に出て、また学校に戻って留学されている方も結構いらっしゃいますね。

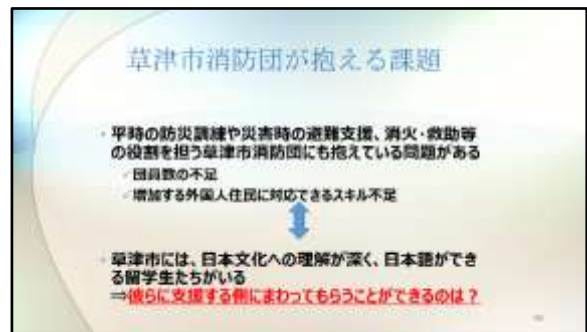
鶴田さん：留学生というと日本人の感覚では19～22歳ぐらいのイメージですが、1度社会に出て、また学校に戻って留学されている方も結構いらっしゃいますね。

中西さん：はい、草津市には留学生が多く、家族帯同の留学生も少なくありません。またパナソニックなどの企業の研修生も多くいらっしゃいます。英語で授業を受けていますが、日本語がほとんどできない人がたくさんいます。学校と家の往復だけですので、地域との接点も少ないです。そういう中で災害が起こったら、弱者になってしまうことになります。

外国人機能別消防団とは

鶴田さん：結成された外国人機能別消防団について教えてください。

中西さん：草津市国際交流協会（K I F A）は草津市が姉妹都市を結んでいるアメリカのポンティアック市などとの交流を担当するためにできました。次第に発展途上国や JICA などの国際協力、そして現在は主に地域に住んでいる外国人との共生と役割も変わってきています。特に阪神淡路大震災のときに、多くの外国人に災害の情報が伝わらなかったということから加速したように思います。草津市の消防団も若い人で団員になる人が少なく不足している。外国人住民は増えているが、言語スキルが日本人の団員にはないという状態でした。草津市には日本文化などの知識が豊富で、日本語も上手で、英語も喋れる、もちろん母国の言葉を喋れるという外国人が結構多いので、彼らを支援するのではなく、彼らにみんなを支援する側に回ってもらうことができるのではないかと考えて、日本初の外国人機能別消防団が 2015 年に結成されました。外国人は消防団員になれないという制度の壁がある



日本初 外国人機能別消防団員誕生

2015年9月1日
当初 留学生6名、会社員2名、主婦1名
団員数 9名
国籍 中国4名、ベトナム4名、韓国1名
年齢 20代～30代

母国語、英語と日本語での日常会話が可能
日本文化に精通している、責任感がある

災害時要援護者の外国人にいち早く情報伝達の役割
「支えられる側」から「支える側」へ

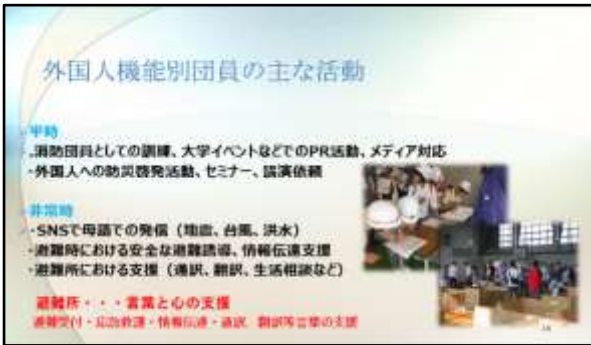
のですが、通訳、翻訳による避難誘導など特定の業務だけを行うというのが機能別消防団です。

機能別消防団は分団ではなく団本部直轄になっています。女性消防団（K F F L）と一緒に啓発活動をすることもあります。K I F Aの日本語クラスで日本語、英語、母国語の最低3カ国語以上できる人をピックアップして説明会を開きました。

全員で9名（中国4名、ベトナム4名、韓国1名）、20～30代のとても若い人たちです。

消防団員としての訓練の他にイベントでの啓発活動、セミナーなどでの講演依頼も最初の頃はありました。県や草津市の避難情報などを母国語に翻訳してSNSで発信しています。幸いまだありませんが、避難所での通訳、翻訳、避難生活の相談のお手伝いも視野に入れて訓練しています。任命後は日本初ということもあり、メディアでもたくさん取り上げられました。K I F Aの日本語教室でも、K F F Lと機能別消防団が合同で啓発活動をして、いろいろな国の学生と一緒に訓練を受けました。草津市国際交流協会では日本語教室を持っているので、授業の一環として防災学習を年に1～2回やっています。毎年4月と10月に任命式もしくは任免と言って辞めていく人もいますので、両方あるのですが、毎年1、2名は入れ替わっています。

鶴田さん：留学生ですから、母国に帰られたりすることもあるかと思います。



中西さん：今年の4月の任命式でベトナム人が1人入りました。草津の4月の宿場まつり、5月のみなくさマルシェにも参加しています。

鶴田さん：活動を広げている外国人機能別消防団ですが、啓発活動などの効果にはどのようなものがありましたか。

中西さん：防災知識のない外国人たちに伝えることで、団員たちは、モチベーションを上げられたこと、活動を通して防災知識を学ぶことができたこと、使命感を持たたということを行っています。

防災とまちづくり～多文化共生の視点から～

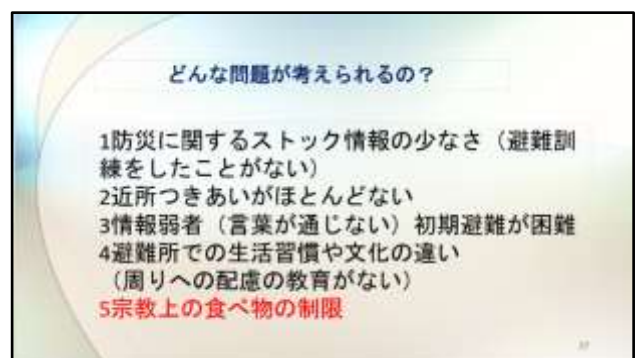
鶴田さん：地域の中で暮らす外国人たちと一緒にまちをつくっていったらと思うのですが。

中西さん：私たちの周囲にも外国人のコミュニティが実は結構あるんです。外国人にも避難所の場所はわかるのかな、わかりやすい表記になってるのかな、災害時はどうやって伝えるのだろうか、言葉のわからない人にどうすればいいのかを日本人の皆様にもイメージしていただきたいと思います。

私たち日本人は小学校の頃から、当たり前のように避難訓練をしていますが、私の生徒たちはほとんど避難訓練をしたことがありません。地震があったらどうするのと聞いたら、エレベーターで逃げるといふ生徒もいます。言葉が通じないので、避難の最初がとても困難だとすごく思います。生活習慣や文化の違いで、日本人側も理解ができていない状況下、避難所で一緒に避難生活することになるわけですから、とても大変だと思います。

鶴田さん：えーっという顔をされて、居づらくなって避難所を出て、車の中で過ごすということも現実に起こっていますね。

中西さん：一番大変なのは宗教上の食べ物の制限があるということです。日本に暮らす外国人によく言われるのは四つの壁があるということです。一つは言葉の壁です。なかなか情報が伝わらない。次が制度の壁、公務員や消防団員など日本国籍に限るというように限定しているのでなかなか



ない。子どもの就学義務も日本国民に限定しているので、外国人の子どもが小学校に行っていないにもかかわらず罰せられることもないし、支援が十分ではありません。三つ目は心の壁です。どうしても差別があるということです。そして災害で問題になるのは四つ目の文化の壁だと思います。外国では親しい人にハグしたりします。でも日本だったらセクハラになったりします。

総務省から多文化共生について「国籍や民族の異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対

等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員としてともに生きていくこと」と定義されています。一人ひとりが地域社会の構成員だということです。いろいろな文化を持つ人たちと避難所で一緒に暮らすということをこれからは考えていかないといけません。対等にそして一緒に地域社会に生きる構成員として考えているかどうかということが重要だと思います。

機能別消防団が発足した2015年には草津市にはまだ多文化共生推進プランはできていませんでした。第5次草津市総合計画の中に、「国際交流の機会を提供し、多文化共生に対する意識の向上を図る」と1行だけ多文化共生の文言がありました。そして2021年に草津市で多文化共生推進プランが策定されました。策定されるよりも以前に機能別消防団ができたことは、すごいことだと思っています。

中西さん：消防団は消火活動をする団体だと認識していたのですが、消火活動だけではなく、いろいろな活動をしていることが機能別消防団に関わるようになってわかってきました。団員たちも日本人との繋がりができるので、他の人たちよりも情報が得やすいということです。外国人だからこそ、できるような役割がたくさんあると思います。

鶴田さん：外国人消防団を間に挟んで日本人と外国人が繋がっていくというイメージですね。実際に地域と繋がって、地域も活発になったという事例を紹介してください。

中西さん：草津市野路町の春の神社のまつりではベトナム人、タイ人、中国人がお神輿を担いでくれました。日本人の若い男性が担いでくれないのか、アパートのオーナーさんなどが神輿を担いでみないかと声をかけてくれたのが発端でした。また「萩まつり」で自分の国の料理を屋台で出して、地域の人と顔の見える関係で、一緒にイベントをすることで仲良くなれました。いざというときもあそこにこういう人が住んでいるとお互いに認識できるんじゃないかという事例です。

鶴田さん：アパートのオーナーさんが最初に外国人の人たちに声をかけたというところが始まりなのですが、地域にそういうキーパーソン的な人がいることも大事なポイントですね。

食と防災～知っていますか？このマーク～

中西さん：このマークをご存知でしょうか？いろいろな食べ物についてです。上の二つはハラールマークです。下の二つはコーシャマークです。ハラールはイスラム教において合法なもの、食べてもいい、食べ物だけではないのですが、イスラムの日常生活において、イスラ



ム教ではこのようにしたらいいですということを「ハラール」、その反対に駄目なことを「ハラム」と言います。下のコーシャマークはユダヤ教です。両方のマークがついているものも最近はたくさんあります。どんな食べ物にマークが入っているのかをいくつか調べてみますと、例えば避難所でも出てくる可能性があるカツサンドですが、豚肉は駄目というのがハラールです。ヨーグルトもゼラチンが入っていますので駄目です。ゼラチンは動物性の牛や豚の筋からつくっているからです。食パンなどもショートニングやマーガリンを使っているのも、動物由来で駄目です。みりんもアルコー

ルですし、マヨネーズもだめなのです。

しかし、ハラール対応のマヨネーズなどイスラムの人たち用に販売されているものもたくさんあります。ハラールというのはイスラム教の人だけが食べるものではないのです。誰でも食べられる。日本人でもそうです。ハラールビジネスと言われますが、日本でもイスラム教の人も増えており、日本だけで20万人もいらっしゃいます。日本に来たのだから、日本のものを食べたらいいのでは、宗教などは無視してなどとおっしゃる方もいますが、アレルギーの人を無視できないのと同じです。アレルギーは命に関わります。ムスリムの敬虔な人たちも命に関わるぐらい信仰をされていますので、決して口にされません。

お湯を入れたら、すぐに食べられる防災食にも「ビリアニ」や「ナシゴレン」があります。ナシゴレンはムスリムが一番多いインドネシアやマレーシアの方がよく食べている焼き飯のようなものです。ビリアニは人口の8割以上がムスリムのパキスタンやバングラディッシュなどで食べられています。このようなものも防災食にあるということに驚きました。ハラールマークが裏面にあります。こういうものがこれからは必要になってくると思います。

これからの防災とまちづくりと多文化共生

中西さん：機能別消防団は二つの大きな賞をいただくことができました。最初に防災まちづくり大賞の総務大臣賞をいただきました。左側の写真はその半年後にいただいた防災功労賞の内閣総理大臣賞です。生まれて初めて総理官邸に入らせていただきました。一人で授賞式に出席したので、当時早稲田大学の博士課程に在籍していた元機能別消防団員の中国人の教え子呼び出して、一緒に喜びを分かち合いました。自分が入っていた団でこんな賞をもらえたと言って喜んでくれました。

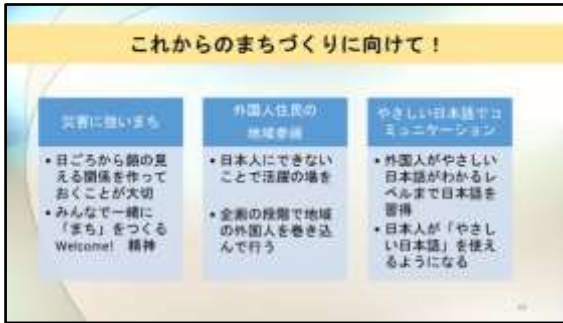


災害弱者として支えられる側の外国人が支える側にシフトチェンジしたということ、2015年から毎年1、2人の団員は入れ替わっていますが9年間続いてきたということの評価していただきました。日本が少子高齢化で人口が減る中、地域の外国人を活用した事例と多文化共生と防災活動を同時に行っているということが評価されたようです。

草津市に続いて、横浜南消防署に3年前に外国人防災指導チームができました。また函館市では通訳に特化した外国人のサポーター制度ができました。外国人観光客が多いところなので、バスの事故がきっかけで必要だと考えられたようです。更に今年度、関西国際空港のある大阪の泉佐野市に草津市と同じ外国人機能別消防団員が誕生するそうです。日本全国にできてほしいと思います。

鶴田さん：中心になって続けてくれる人、見守ってくれる人がいないと続かないと思います。行政でどこかの部署が担当するだけでは、職員さんも変わっていくので、草津市は中西さんがいらっしゃるということで、継続できているのかなと思います。

中西さん：災害に強いまちにするには、日本人、外国人に関係なく日ごろから挨拶などをして顔の



見える関係をつくっていくことが大切です。日本人だけで固まるのではなく、地域のイベントをするときには外国人にも声をかけて、一緒にやろうというように活躍の場をつくっていけば、いざというときに災害を減らすこともできるのではないかと思います。

鶴田さん：文化の違いをうまく生かし、まちづくりにも取り入れると災害に強いまちづくり、いろいろな意味で強いまちづくりができるのではないかということですね。

中西さん：情報がうまく伝わらない、日本語が不自由と言われますが、日本語が全く伝わらない人外国人は少ないのです。日常会話などは結構わかるのです。難しい日本語がわからないのです。少し言い方を変えればすぐ伝わるのです。日本人がもう少し相手がわかるようなやさしい日本語を使うという歩み寄りが大切です。避難所でも会話ができないのではなく、相手がわかるまでトライしてみるとということも大切だと思います。阪神・淡路大震災の時から、小学生2、3年生ぐらいが理解できる『やさしい日本語』という言葉が重要とされています。

鶴田さん：こういう言葉で会話をしましょう、文章を書きましょうと『やさしい日本語』を推めていただければ、外国人だけではなく、新しい横文字に弱い高齢者の方にとってもわかりやすくなるということですね。

中西さん：最近は団員が活動服を着なくてもいい依頼もあります。多言語の易しい日本語のセミナーで言葉を伝えるなど彼らはいろいろなことができますので、工夫してやっていきたいです。大学やいろいろな担当課が情報を共有しないと、機能別消防団がどういう活躍をしているかわからないので、このような活動をしてもらえるんだ、こんな可能性があるのだということをお互いに専門分野が異なっても連携しながら補い合っていくことが重要だと思っています。外国籍の方々、外国にルーツのある方々と日頃からコミュニケーションをつくっておくということは、災害の時にとても役に立つと思います。特に、外国人の方は若い人が多いので、いざというときには外国人の方が地域の高齢者を助けてくれる可能性が高いと思います。外国人も地域の一構成員としてまちづくりを考えていくことで、災害にも備えることができると思います。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：発足後、苦労された点、よかった点はありますか。

答：最初の頃は本当に大変でした。私との信頼関係で入ってもらったので、よくわからない状況で入った学生もいまして、モチベーションもあまり高くありませんでした。私も消防に関して知識がなかったので申し訳なかったと思っています。当初は珍しいので客寄せパンダのような感じでした。担当課の方から頼まれてお手伝いをしたみたいで、きちんとした計画性もありませんでしたが、最近は連携がうまくできています。

2、3年で去っていく留学生もいるのですが、活動したことをすごく誇りに思うと言ってくれています。団員を辞めても、次の世代に伝えてくれている人がいるということが一番良かったことだと思っています。

問：県内で広めるにはどういうことが必要だと思いますか。

答：大津市に学生機能別消防団員ができたと聞きました。草津市も日本人学生の消防団員も今年から募集しています。外国人、日本人関係なく、若い人に活躍してもらう仕組みをつくる必要があると思います。高齢者の方が増えていきますので、少しでも若い人が日頃から知識を身につけてくれるとありがたいと思います。

問：避難の必要性やハザードマップの内容などで外国人に伝わりづかったことはありませんか。

答：ハザードマップを見る訓練もしていますが、地図を見て自分がどこに住んでいるかを教えたりしないことには見る機会もありません。ハザードマップはまちづくりセンターや市役所に置いてあることを知ってもらうところから始めることかなと思います。ハザードマップを見るセミナーや説明会をしますと言っても、外国人の方は、言葉がよくわからないし、そういうところに自分たちは行ってもいいのかなと戸惑うことが多いと思います。日頃から地域に住んでおられる外国人の方とどういう繋がりを持っているかということになってくるとと思います。

中西さん、鶴田さん、参加者のみなさん ありがとうございます。



ファシリテーター：鶴田 真理子 さん